関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

イラン技術文化史紀行　テペ・シアルクとカシャン オアシス

著者	下間 頼一，緒方 正則，塩津 宣子
雑誌名	阡陵 ： 関西大学博物館彙報
巻	55
ページ	2-3
発行年	2007-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023962

イラン技術文化史紀行
テペ・シアルクとカシャンオアシス

下間頼一　緒方正則　塩津宣子

2002年12月27日、Tepe（又はMound）SialkとKāshānを訪ねる幸運に恵まれた。テペ・シアルクは新石器時代よりの遺丘が幾層にも重なる重要な遺跡である。カシャンは土漠中のオアシス都市として長い歴史を持つ。

KāshānはTeheranの南177km、土漠の緑のオアシス。人口約6万人。土埃りにまみれて乾ききった土漠の旅を続け水に潤された緑のオアシスに着くとホッと癒される。この水はカナートではなくザグロス山脈の雪解け水が伏流となり、泉として湧きだした。緑に囲まれた日干し煉瓦の民家ばかりである。断熱性に優れ50℃に近い日較差を凌ぐのに最適。南西郊に19世紀初めに作られた王の庭Fin Gardenがある。王の離宮である。泉水滾々と湧き、幾何文水路が縦横に巡り、樹林亭々。まさに水と緑の桃源郷である。薔薇水の芳香は人を幻惑する。

Tepe SialkはKāshānの　南　西5km、Zagros山脈東北麓の土漠にある。水に恵まれたオアシスで1930年にRoman Ghirshman等欧州考古学者により発掘された。南北の交易路の要衝として新石器時代より青銅器時代（約5000～2500BC）にかけて村落が営まれた。遺跡は1kmを隔てる南北の2丘がある。今回は南丘を訪れた。遺丘への道を登る。左手に覆いをかけられた日干し煉瓦積みが保存されている。頂上に立つとテペ全景が鳥瞰出来る。渺々たる土漠の右彼方にカシャンオアシス、左手に僅かな緑（麦畑か）が見える。目測10m以上の深い竪坑が掘られ幾重もの層位が認められる。層位の境に目印が付けられ、一目瞭然である。発掘調査中であろうか。しかし発掘機材はみられない。何重もの層位を眼に焼き付け、永い永い人類の歴史がここにあるという感動にとらわれた。

層位は4期に分かたれる。5000BCに始まる第1期層よりフリントの歯を着けた鎌が出土した。農耕を示している。牛や羊が飼われた。自然銅で作った錐が出土した。死者は赤色顔料を塗って屈葬された。2期より日干し煉瓦が用いられた。強い日差しから守るため覆いを掛けて保存されている。強固な煉瓦積みで4000年の時を黙して語る。2期層よりトルコ石・玉髄・ペルシャの貝など遠方交易を示す遺物が出土した。第3期に文化は飛躍的に発達した。銅の鋳造が始まり、轆轤で土器が作られ、煙道を持つ窯で焼かれた。スタンプ印章が多く出土し交易の普及を物語る。第4期はエラム期で、エラム文字碑文が出土した。多くの彩文土器が出土し、波状の水文、格子状の耕地文などが明瞭である。土器や円筒印章はメソポタミア文明との

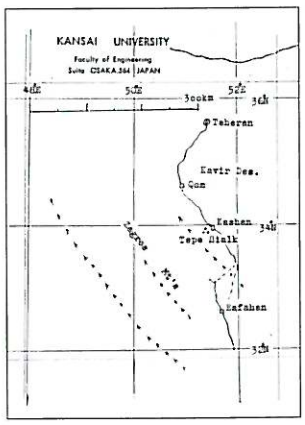

図1　Kāshān Tepe Sialk近傍地図

図2　Zagros山脈遠望

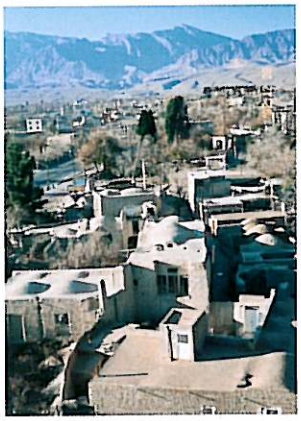

図3　Kāshānのホテルの3階よりOasisを望む日干煉瓦の家々（筆者撮影）

図4　Fin Gardenの幾何文水路（筆者撮影）

下間頼一：関西大学名誉教授　緒方正則：関西大学専任講師　塩津宣子：技術文化史研究会

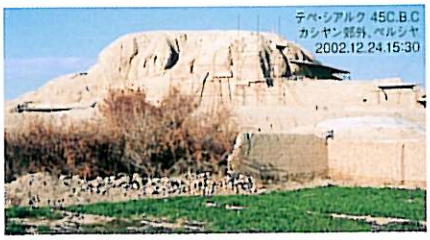

図5　Tepe Sialk、荒涼たる漠地に立ち感慨無量（筆者撮影）

図6　日干煉瓦遺跡（筆者撮影）

図7　Tepe Sialkの頂上の眺望。右手遠くKāshān Oasis、手前僅かな耕地（筆者撮影）

交流を示す。装飾品にインダス文明やエジプト文明の影響が認められる。[1)]

渺々たる土漠、振り返るとザグロク山麓が近い。遠く白雪の峰々が望まれる。カシャンは水に恵まれ、緑豊かなオアシス。ここに古代文明が開花した。ザグロス山中にはルリスタンの青銅器文化が花開いた。

帰途、遺跡入り口の標識のziggurat のCAD図に気付いた。2002年Iran Cultural Heritage Organization（ペンシルバニア大学のSahmirzadi博士等のチーム）により復元されたジグラットの3次元CAD図である。エラム王国のジグラットは4基。Chogazanbil z,（1250BC頃）、Susa z,（1800BC）, Haft Teppeh z,（1375BC）とTepe Sialk z,（1290BC）である。シアルクのジグラットは32番目に確認された。ひな壇型で、3つのテラスと2つのスロープを持つ独特の設計である。大小2基の複合体ともみられる。

南丘の近くに出土陶片が層位別に整然とならべられていた。エラム期陶片には面白い文様が描かれている。古代人の生活感情がにじみ出ている。茫洋たる土漠の中、雄大な遺丘を仰ぎ、土器片の山を前にしてしばし遊心千古の想いにふけった。

謝辞　適切なご高導を頂いた飛田正美先生（加曽利貝塚博）・格別の便宜を与えられた山口卓也氏（関大博）・文献調査に多大の援助を頂いた石立弥生子氏（関大博）・図書文献を調査された奥村政博氏（関大図）に深甚なる謝意を表します。

【参考文献】

1）西谷真治；水野清一・小林行雄編、図解考古学辞典　1961東京創元社
2）Wikipedia,the free encyclopedia by Wikimedia Foundation 2007 U、S、A、

図8　深い竪坑

図9　整然と並べられた出土陶片、右はエラム期層出土

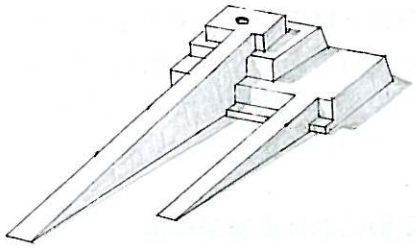

図10　ziggurat、CAD復元図（遺跡入口の標識図より筆者描く、多少の誤差は御寛恕下さい）

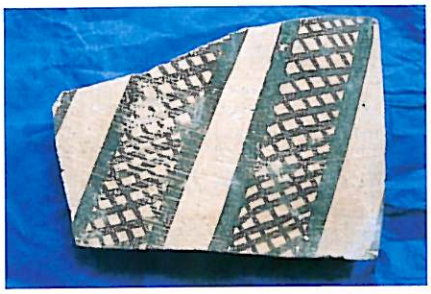

図11　エラム期層出土の彩陶片（長75×幅55×厚8mm）